

目次

こくさい
国際協力にとりくむ
ボランティアを紹介するよ。



はじめに 西尾雄志	4
-----------	---

国際協力ボランティアおすすめチャート	6
--------------------	---

第 1 章 開発支援を行う

政府開発援助（ODA）ボランティア JICA 海外協力隊	10
開発途上国を支援し、相互理解を深め、海外での経験を日本の力に	

水源確保ボランティア ペシャワール会	14
中村哲医師の活動をささえ、アフガニスタンへの志を受けつぐ	

第 2 章 人道支援を行う

医療支援ボランティア 国境なき医師団日本	20
国や宗教で区別することなく、医療を提供し、状況の証言者となる	

女性の健康支援ボランティア ジョイセフ	24
世界の女性の健康と自分らしい生きかたを支援	

貧困・紛争・災害下の子ども支援活動 アイキャン	28
フィリピンで子どもたちの権利をまもる	

第 3 章 国内にいる外国人をささえる

技能実習生・留学生支援ボランティア 日越ともいき支援会	34
ベトナム人技能実習生や留学生の生命と人権をまもる	

外国ルーツの子ども支援ボランティア トルシーダ	38
ブラジル人児童に日本語を教え、地域にとけこむ支援をする	

解説 国際協力とボランティア	42
----------------	----

さくいん	47
------	----

ボランティアと SDGs

2015 年 9 月 25 日の国連サミットで、地球環境を保全しながら発展をつづけるための目標「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択されました。SDGs は、2016 年から 2030 年の 15 年間で国連加盟国が達成すべき 17 の目標（ゴール）と 169 のターゲット（ゴールにいたるための具体的な課題）で構成されています。17 の目標は、国だけでなく企業や市民が参加し、社会全体で達成をめざすものとされています。本書では、ボランティアの活動を SDGs の観点からとらえ、SDGs のどの目標にかかわるかを右のアイコンでしめています。



団体名の表示について

この本で活動を取りあげている団体には、NPO 法人および認定 NPO 法人がふくまれます。NPO 法人は、NPO 法人（特定非営利活動法人）制度にもとづき、団体の名前で契約や取引ができる法人格を得た団体です。認定 NPO 法人は、NPO 法人のなかでも、その団体に寄付した人が税の優遇を受けられる団体です。

NPO 法人は特定非営利活動法人ともよばれますが、この本では NPO 法人と記します。また、各団体の種類は「団体データ」内の「団体名称」にします。



中村哲医師の活動をささえ、 アフガニスタンへの志を受けつぐ

ペシャワール会

ペシャワール会^{かい}は、医師の中村哲^{なかむらてつし}さんの活動をささえることを目的に結成された国際NGOです。中村医師はパキスタンとアフガニスタンで医療活動を行い、アフガニスタンの大干ばつから人びとをまもるため、灌漑事業^{かんがい}（用水路づくり）にも力を注ぎました。2019年、中村医師が凶弾^{きようだん}にたおれたあと、残された事業は地元の人びととペシャワール会が受けついでいます。

アフガニスタンでは
何十年も政治的混乱^{せいじてきこんらん}が
つづいているんだ。



中村哲医師の活動を支援

中村哲医師^{なかむらてつし}は、はじめ精神科医^{せいしんか}、神経内科医^{しんけい内科医}として地元九州の病院ではたらいていましたが、1983年、キリスト教系医療支援団体からの依頼を受け、パキスタンのペシャワールにある病院ではたらくことを決めました。決断^{けつだん}の決め手になったのは、以前、福岡の登山会のパキスタン遠征に医師として同行した際に出会った、医療が受けられないまずしい人びとのすがたです。中村医師の壮行会^{そうこうかい}に集まった友人たちがメンバーとなり、ペシャワール会^{かい}は結成されました。

中村医師がペシャワールでとくに力を注いだのが、ハンセン病の治療です。ハンセン病は「らい菌^{きん}」により皮膚や神経がおかされる病気で、現在は治療可能ですが、昔は不治の感染症^{かんせんしょう}でした。パキスタンでは当時約2万人ものハンセン病患者^{かんじゃ}がいましたが、病気への偏見^{へんけん}から、医師も医療物資も極端に不足していました。ペシャワール会^{かい}は募金を集め、治療に必要なものを日本から送りました。また

現地の女性^{げんち}は宗教上^{じょうせい}、家族以外^{しゅうきょうじゅう}の男性^{だんせい}に肌を見せないため、1988年、女性看護師^{かんごし}をはじめて現地に送りだしました。

当時のペシャワールには、アフガニスタン紛争からのがれた難民^{なんみん}が多く住んでいました。1986年、中村医師は、JAMS（ジャパン・アフガン・メディカル・サービス）という難民支援のための団体を設立し、難民キャンプ（難民や国内避難民の滞在施設）での医療活動を開始しました。また、アフガニスタン国境の山村には医療施設がなく、ハンセン病だけでなくほかの感染症^{かんせんしょう}患者も多いことを知り、その地域に診療所をつくろうと決意しました。やがてアフガニスタン紛争の状況は大きく変わり、政治的混乱^{せいじてきこんらん}がつづきましたが、中村医師は慎重に計画を進め、1990年代前半にアフガニスタンとパキスタンにかけて合計6か所の山村診療所を開き、現地スタッフとともに診療を行いました。

1994年、キリスト教系の病院をやめて、独自の活動に専念するようになった中村医師は、現地での活動団体、PMS（現在のピースジャパン・メディカル・サービス／平和医療団日本）を立ちあげ、1998年ペシャワールにPMS病院を設立しました。JAMSはPMS病院に吸収され、病院の医師が交代で診療所に行くようになりました。ペシャワール会はこのPMSの活動を支援するために、日本側で広報や寄付金集めなどをにっています。

命をすくうために 井戸・用水路をつくる

2000年、アフガニスタンは大干ばつに見舞われます。食糧生産は例年の半分以上となり、飢えと水不足による病気が国中に広がりました。「薬で飢えとかわきはなおせない」とさったPMSは井戸をほる事業をはじめます。日本からもペシャワール会を通し、ボランティアが参加し、現地の人とともに作業をしました。その結果、2008年までに約1600本の井戸がほられ、多くの命がすくわれました。



1986年撮影のアフガニスタン難民の診療をする中村哲医師（写真中央）。現地の人びとの習慣を尊重し、バールをとることを強要しませんでした。



NGO

平和や人権、環境問題などに関する活動をしている非営利の民間組織。非政府組織ともいう。



PMS支援室長の 藤田千代子さんに聞きました



中村先生の講演で女性スタッフが必要と聞き、1990年看護師として現地に行きました。治安悪化で帰国した2009年以後は日本からPMSを支援しています。

中村先生は現地の言語でこまっている人から直接話を聞くことを重視し、日本人スタッフには「現地の人の習慣を尊重し、自分のものさしで『おくらしている』『おとっている』と判断してはいけない」と何度も注意していました。人間の生命を最優先で考え、行動していた中村先生の精神を、わたしたちは今後も受けついでいきます。



団体データ

団体名称	ペシャワール会
設立	1983年
所在地	福岡県福岡市中央区春吉1-16-8 VEGA天神南601号
電話	092-731-2372
ファクス	092-731-2373
メール	peshawar@kkh.biglobe.ne.jp
ホームページ	http://www.peshawar-pms.com/

スタッフの声

やましたはやと
山下隼人さん

就職活動中に中村先生の講演

に行きました。「どういう人とはたらかたいですか」という来場者からの質問に、先生は「職場を明るくする元気な人がいい

ですね」と答えていました。「それでいいなら」と思い応募しました。2019年に入職し、現在は農業部門と会計を担当しています。現地担当者とアフガニスタンのことばパシュトゥ語と、英語でやりとりしています。パシュトゥ語は中村先生がつくったテキストで勉強中です。日々変化がある仕事で、自分の世界がどんどん広がっていくように感じています。

それがアフガニスタン復興の基礎と考え、アフガニスタン東部での農業・農村復興事業「緑の大地計画」を発表しました。その要になったのは用水路づくりです。中村医師は、何かあっても地元の人が自分たちの手で修復できる用水路にしようと、みずから日本の明治以前の用水路の技術を研究しました。政治的な混乱や内戦がつづくなか、用水路建設は困難なときもありましたが、中村医師は何が起きてもあきらめず、2009年には約25キロメートルの用水路に水を通すことに成功します。その後

飢餓がつづく2001年、大事件が発生します。当時、アフガニスタンを支配していたタリバン政権がかくまっていたといわれる、テロ組織アルカイダがアメリカで同時多発テロ「9・11事件」を起こしたのです。アメリカがアフガニスタンに対して報復を宣言しましたが、緊急帰国した中村医師は日本の国会や人びとに「アフガニスタンに必要なのは爆弾ではなくパンだ」とうったえました。すると日本からペシャワール会に寄付がよせられ、飢えと空爆の危険にさらされている約27万の人たちに食糧をとどけることができました。

報復攻撃に当時のタリバン政権は敗れ、2002年アフガニスタンに新政権が発足しますが、その後もきびしい干ばつと内戦で市民の苦境はつづきます。中村医師は農村の回復こ

10か所の堰*をつくり、用水路を整備し、1万6500ヘクタールが水の使える農地となり、65万人が自給自足で生活できるようになりました。

PMSはアフガニスタンで医療だけでなく、灌漑事業（用水路づくり）、試験農場での農業事業を手がける団体となり、日本のペシャワール会は、そのすべてを支援するようになりました。PMSの拠点は、2009年治安の悪化したペシャワールからアフガニスタンのジャララバードに移転しましたが、日本では、ペシャワール会の名前はそのまま残されました。



中村医師は福岡県朝倉市に残る、江戸時代の干ばつ対策でつくられた「山田堰」をアフガニスタンの取水堰と用水路づくりの参考にしました。

*水をほかのところへ引いたり、流量を調節したりするために川の水をせきとめる構造物。



干ばつで砂漠化した農地（写真左）が、用水路によって緑地にもどりました（写真右）。



現地で受けつがれる中村医師の思い

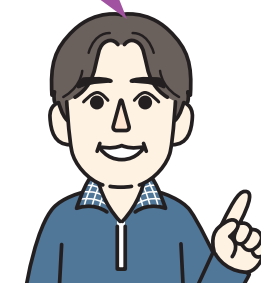
中村医師は2019年12月4日武装集団の銃撃により、73歳で帰らぬ人となりました。アフガニスタン市民のために身を粉にして活動していた中村医師の死は、アフガニスタンの人びとにも衝撃をあたえました。大きな悲しみのなか、ペシャワール会とPMSは中村医師の志を受けつぎ、これまでどおり活動をつづけることを決めました。

2020年、アメリカなどによる多国籍軍が撤退を表明し、2021年8月、ふたたびタリバンが政権を掌握しました。しかし、かつて人権侵害を行ったタリバンに対して国際社会は反対し、援助を中断します。

そのいっぽうアフガニスタンは2000年からの干ばつで、1千万人以上に餓死の危険がせまっていました。PMSはタリバンからの攻撃はないと判断し、活動を再開するとともに、ペシャワール会が中村医師が確立した用水路のつくりかたをガイドラインにまとめました。タリバン新政府は、干ばつのつづくアフガニスタン各地で、このガイドラインを参考にアフガニスタンの人たちが用水路づくりにとりくむことを願っています。

中村医師の命を大切にすることは、政治や宗教をこえて国の未来を動かそうとしています。ペシャワール会は今後最低20年は活動をつづけることが必要と考え、若いスタッフやボランティアを積極的に受けいれています。

大干ばつは地球温暖化が原因といわれているよ。



ボランティアの声

ふじのようこ
藤野洋子さん

約30年前からペシャワール会のお手伝いをしています。初期は毎週水曜夜に有志10名ほどが集まり、会合や会報発送の作業をしていました。中村先生の

活動範囲が広がるとともに会も大きくなり、わたしも2000年から2003年にかけて仕事が休みのときなどは、会計指導のため現地に行きました。中村先生はふだんおだやかですが、現地の人というべきことはいい、約束はまもるという強さがありました。先生のためにもペシャワール会が長くつづいてほしいと思います。